

ホワイトのセルボーン——博物誌と「場所の感覚」

生 田 省 悟

「腰を落ち着けて暮らすのにふさわしい場所のうち、最も喜ばしいのは
辺鄙な田舎の小さな村」——メアリ・ラッセル・ミットフォード

〈はじめに——「場所の感覚」〉

地球規模の環境破壊が深刻さの度合を増し、私たちの環境意識もいやおうなしに高まっていかざるをえない現在、文学のさらなる可能性を模索するものとして、ネイチャーライティングの動向が注目を集めてきている。この、人間と自然との交渉を再確認し、新たな意義深い関係を定位することをめざすジャンルにあっては、とりわけその発信地アメリカの場合、「場所の感覚」(sense of place)が重要なテーマのひとつだとされる。そのような感覚の本質を端的に物語っているのは、ウォレス・ステグナーの印象深いエッセイ『場所の感覚』(*The Sense of Place*, 1986)で紹介された、「自分どこにいるのかを知らなければ、自分がいったい誰であるかはわからない」というウェンデル・ベリーの言葉であろう。この言葉が現に『場所の感覚』で展開される論議の軸となっている事実からも察せられるように、ベリーは自らのアイデンティティを問うという課題を告白すると同時に、多くの作家(ネイチャーライター)たちの認識を集約してもいるのである。たとえばジョン・ダニエルは『家路』(*Trail Home*, 1992)で定住という問題を取り上げ、「心に土地を繋ぎとめる術を学ぶこと」を語りかけようとするが、その論議の基底にはやはり、「場所の感覚」が存在している。¹あるいはバリー・ロペス、エドワード・アビー、ロバート・フィンチなどの執筆活動にも「場所の感覚」を核とする側面が確実に見受けられる。移民／移動国家アメリカに特有の歴史性・文化性と密接に関わる個人のアイデンティティのありかたが、「場所の感覚」を通じてネイチャーライターたちの意識に浮上し

ているのだとも言えるかもしれない。その上、「場所の感覚」は、観念的な意味での自然ではなく、特定の土地あるいは具体的な動植物との積極的かつ親密な交わりと、それに基づく詳細な知識を根幹としている。自然が単なるモチーフや感情移入の対象で終わってはいないのである。

このとき、ネイチャーライティングにおける論議の対象を先取りした古典的な事例として、当然のこのように想起されるのは18世紀イギリスの聖職者ギルバート・ホワイト (Gilbert White, 1720-93) であろう。フランク・ステュワートはホワイトについて、次のように述べている。

長らくホワイトは、多くの人々がいまだにネイチャーライティングと結び付けているものの規範であり続けてきた。実際、ホワイトの直後に自然や景観について記述した作家たちは、ソローを含め、文体と内容の点で、また正確さと謙虚さの点で、セルボーンの柔和な牧師補を基準として評価された。いかにソローが自らを意図的にホワイトから差異化したかを見れば、ソローや彼に続く作家たちに対する私たちの理解は深まっていくはずである。²

この見解は、ネイチャーライティングの源流とされるソローの背後にホワイトの博物誌という、さらなる源泉が存在していたことを言い当てたものである。

文学的系譜を巡るこのような位置づけは別にしても、周知のようにホワイトは73年に近い生涯のうち、かなりの時間を生まれ故郷のセルボーンで過ごし、牧師補としての職務のかたわら、周囲の自然観察に勤しんだ。また、その著作『セルボーンの博物誌』 (*The Natural History of Selborne*, 1788) を刊行するにあたり、本文に先行する「広告」 (Advertisement) において

著者 [ホワイト] はこのようにも考えております。すなわち、もしも定住者が自分たちの暮らす地域に何らかの注意を払い、周囲の事物に関する自分自身の思いを公にするなら、そうした資料からは完璧なことこの上ない郡誌が導き出されるでしょう……³

と明言している。これが、セルボーンにおける長年の経験を踏まえた発言であろうことは疑うまでもない。だとすれば、「場所の感覚」を想定したとき、自然の事物と向き合ったナチュラリストとしてのホワイトが言う「定住者」(“stationary men”)とはどのような存在なのか、あるいは自らを「定住者」の一人と暗に規定する意識が、セルボーンという土地との関わりを通じてどのように形成されたのかを考察することは決して無益な試みではないと思われる。むしろ(アメリカのみにとどまらず、私たちもその方向性を探究すべき)現在のネイチャーライティングに内包される課題の一端を、逆にホワイトが照射する事態さえ予測されるのである。

〈ホワイトの時代——博物誌の視点から〉

ヨーロッパにおける博物誌には、アリストテレスあるいはプリーニウスなどから連綿と受け継がれてきた系譜が存在する。これを遺漏なく概観することなど不可能だが、ホワイトに至るためには、少なくとも18世紀という時代の博物誌の状況がどのような様相を呈していたのかを一応は認識しておく必要がある。あえて誤解を恐れずに言えば、現代の私たちが一般的に博物誌ないし自然誌(natural history)と呼んでいる領域の直接の起源はルネサンスに求められる。この時代以前の博物誌が野外の自然観察を伴っていながらも、実生活に有益な薬草学などを除けば、伝聞、空想、民間伝承、迷信、あるいは他人の著書からの引用に満ちあふれていた事実は、プリーニウスの恐るべきレファレンス・マニアぶりによっても想起されるであろう。ルネサンスあっては、このような要因が完全には払拭されたわけではないが、従来とは異なる状況が成立した。王侯貴族あるいは富裕な市民階級の間には流行した「珍品収蔵室(cabinet of curiosities)」趣味などがその経緯を伝えているように、通商の拡大ともあいまって、ヨーロッパの人々はかつて目にしたこともなかったような異国の品々や動植物に接する機会を得ることとなった。要するに、徐々に実物が空想に取って代わっていったのである。これと並行して、自然界の事物や生物を分類する試み、つまり人間の知の枠組みに取り込む行為が、肉眼による形態的差異の検

証や解剖による構造的特性の認知などを通じて見られるようになった。いくつかの留保条件が想定されるものの、科学的な自然理解の方向性はこの時代に形成されていったと言える。

研究者たちの精力的な活動が見られたという点では、イギリスも例外ではなかった。ウィリアム・ターナー (1510-68)、トマス・ペニー (?-1589)、トマス・モフェット (1553-1604)、エドワード・トプセル (?-1638?)、クリストファ・メレット (1614-95) などを含むさまざまな人物が博物誌の先駆者として、ときには荒唐無稽としか思われなほどの誤謬を孕みながらも、優れた知見をもたらしたのである。⁴合理的科学精神を提唱する王立協会 (Royal Society) が1662年に設立された背景には、自然界を構成するものそれ自体を対象とする、近代初期の営為が要因として存在していたはずである。碩学キース・トマスはイギリスにおける自然観の変遷を考察した名著『人間と自然界』において、「1500年から1800年にかけて、あらゆる社会階層の男女が周囲の自然界を知覚し、分類する方法に夥しい変化が生じた」と指摘した上で、次のように述べている。

その過程で、自然における人間の位置に関して長らく確立されてきた教義のいくつかが放棄された。動植物や景観に対する新たな感受性が生じたのである。人間と他の生物との関係は再定義された。また、自らの利益のためにそうした生物を搾取してもかまわないという人間の権利は厳しい非難を浴びた。この数世紀の間にこそ、自然界に対する熱烈な関心と、私たちが拡大された形で受け継ぐことになった、自然に対する人間の関係を巡る疑念と不安とが発生したのであった。⁵

トマスの網羅的な見解について、ここで詳細に論じる余裕はないが、博物誌の動向も恐らくは自然に対するこのような態度の推移——自然それ自体へ向けられた関心及び人間と自然との関係の再認識——と無縁ではなかった。

ホワイトが生きた18世紀はしばしば博物誌の時代と称される。当時は、動植物の収集熱が広く一般庶民にまで及んだばかりでなく、過去数世紀にわたって蓄積された情報を合理的な秩序に還元すること、つまり知識をいかに体系づ

けるべきかという命題に多大な情熱が注がれた時代でもあった。こうした状況は、余りにも著名な植物学者リンネ (1707-78) を座標軸とすることで、ある程度までは俯瞰される。⁶若きリンネが 1735 年に発表した代表的著作の『自然の体系』 (*Systema Naturae*) は雄しべと雌しべとを基準として植物分類を試みた画期的な企て (雌雄薬分類法) であり、これはリンネ自身によって「性の体系」と呼ばれた。しかし、「性の体系」はリンネ自身も承知していたように人為的な分類方法であったため、当初より、自然分類的な方向をめざしたフランスの研究者などから批判を浴びせられた。(付言しておくなら、現代の分類学はリンネの立場には拠らず、トゥルヌフォールなどが提唱した 18 世紀フランスの学説を基礎としている)。あるいは、『自然の体系』では雄しべと雌しべの関係がしばしば人間の結婚にたとえられていたため、道徳的に不謹慎な説であると攻撃されたりもしている。

とはいえ、こうした障害が立ちはだかったにもかかわらず、リンネの説は本国スウェーデンにとどまらず全ヨーロッパに次第に広まり、なかでもイギリスでは好意をもって迎えられた。「性の体系」は具体的な雄しべと雌しべに依拠する以上、博物誌に関心を寄せる一般の市民層にも理解可能なものであったことが、その理由としてまず推測される。また、あの画期的な二名法も無視できない要因であったに違いない。しかしながら、より重要なのは、むしろリンネの著作が持つ精神的な意義であろう。『自然の体系』の巻頭には『詩篇』104・24 が引かれている。「エホヴァよ、汝の御業は如何にさわる。これらは皆、汝の知恵にて創り給えり。汝の諸々の富は地に満つ」という言葉が象徴的に示すとおり、リンネの方法は神による創造の真理とそれに対する揺るぎない信仰に支えられている。つまりリンネにとって、自然を研究することは神学的行為の実践に他ならなかった。これは当時の多くの科学者や博物誌研究者が取った姿勢と何ら変わるところがない。自然界の事物に命名し、ある秩序に従って分類・配列する試みの目的とは、絶対の存在として宇宙・自然界を規定する神の法則を解き明かし、究極的には神の恩寵を証明することにあつた。この事態は、18 世紀における自然神学のありようとみごとに合致する。リンネは独創的な手法に依拠しながら、あくまでも信仰の証しを示そうと試みたに違いない。幸

福な形で宗教と結び付いている限りにおいて、知の最前線とも言える博物誌は、科学的合理主義の気配を感じつつも信仰心に篤い当時の人々にとって魅力的な学問となりえたのである。

リンネの学説が曲折を経ながらイギリスでも歓迎されていった経緯について、若干の補足をしておく必要がある。先に触れたように、この国でも博物誌に対する関心は高かったが、従来の研究の動向を集大成したと考えられるほどの人物がすでにリンネよりも以前に存在していた。ジョン・レイ (John Ray, 1627-1705) である。種 (species) の概念を確立するのに貢献したことで知られるレイは、敬虔なキリスト教徒としての立場から博物誌を神の摂理を知る手段とみなした。彼の場合はリンネとは異なり、自然分類に近い観点から、事物を分類する際にはさまざまな恒常的性質を判断し、経験に照らして記述するというものであった。レイの経験主義が後のイギリスの科学者たちを導く大きな指針のひとつとなったこと、リンネでさえ反発を覚えながらもレイの影響を受けたことなどはよく知られた事実である。レイはまた、1691年に「創造の御業における神の叡知」(“Wisdom of God manifested in the Works of Creation”)を發表している。題名からも明らかなおり、この論文もやはり、科学・博物誌を通して神の摂理を証明することを意図したものであり、レイの著作のうちでも特に人気を博し、内外で広く読まれたという。⁷このようにレイを典型とする知の集積という下地があって初めて、リンネの斬新さはイギリスに受け入れられたと言える。レイあるいはリンネの影響の下、この国における博物誌研究も大陸の趨勢と歩調を合わせ、内外から持ち込まれる珍しい標本を収集・分類することを主眼としていた。神の創造に新たな種をいかに組み入れるかという意義からすれば、これは必然的な現象であると同時に厳粛な課題でもあった。

当時の文学に眼を転じると、アレグザンダー・ポープの『人間論』(*An Essay on Man*, 1733-34)に興味深い一節を見いだすことができる。この箇所ではポープは創造主としての神による秩序と調和を称え、「存在の広大な連鎖」を美しく歌い上げるとともに、神の摂理に背く人間の傲岸さを叱責する。有名な一節であるため、原文のまま引いておきたい。

See, thro' this air, this ocean, and this earth,
 All matter quick, and bursting into birth.
 Above, how high, progressive life may go!
 Around, how wide! how deep extend below!
 Vast chain of Being, which from God began,
 Natures aethereal, human, angel, man,
 Beast, bird, fish, insect! what no eye can see,
 No glass can reach! from Infinite to thee,
 From thee to Nothing!—On superior pow'rs
 Were we to press, inferior might on ours:
 Or in the full creation leave a void,
 Where, one step broken, the great scale's destroy'd:
 From Nature's chain whatever link you strike,
 Tenth or ten thousandth, breaks the chain alike.

And if each system in gradation roll,
 Alike essential to th'amazing whole;
 The least confusion but in one, not all
 That system only, but the whole must fall.
 Let Earth unbalanc'd from her orbit fly,
 Planets and Suns run lawless thro' the sky,
 Let ruling Angels from their spheres be hurl'd,
 Being on being wreck'd, and world on world,
 Heav'n's whole foundations to their centre nod,
 And Nature tremble to the throne of God:
 All this dread ORDER break—for whom? for thee?
 Vile worm!—oh Madness, Pride, Impiety!

(Epistle I, 233-58)⁸

三度用いられる“Nature(s)”や二度繰り返される“system”はもとより、大文字表記の“ORDER”からも読み取られるように、伝統的な宇宙観を弁護する詩人の保守主義は、リンネの基本的姿勢と同質のものを伝えている。その類似性は、単なる表層的な現象と言って見逃したままにはしておけないほどである。しかも『自然の体系』と『人間論』との間には、わずか一、二年の隔たりしかなかった。いま、傍証として挙げたレイやポープからも容易に推測されるように、イギリスには宗教と矛盾しない科学の最先端＝リンネ的博物誌を受け入れる精神風土が成立していたのである。

「存在の連鎖におけるもうひとつの美しい環」(“another beautiful link in the chain of beings”)⁹の喪失を嘆いたことがあるホワイト自身、しばしば尊敬の念を込めてレイやリンネに言及している。また、オックスフォード時代にはポープとも面識があって、詩人が訳した『イーリアス』を贈呈されたという。こうした挿話からだけでも、聖職者／博物誌研究者ホワイトが時代精神と関わり、何らかの形でそれを他の人々と共有していたことが窺われる。ちなみに、この国でリンネ協会が設立されたのは『セルボーンの博物誌』の上梓と同じ、1788年のことであった。

〈ホワイトとその著作〉

ハンプシャー州セルボーンはロンドンの南西約50マイルに位置している。ギルバート・ホワイトは1720年7月18日、この小さな村に11人兄弟の長男として生まれた。父は事務弁護士及び治安判事、祖父はセルボーンの教区長を、それぞれ務めていた。ギルバートは1740年にオックスフォード大学オーリアル学寮に入学、ついで給費研究員、学寮監などを歴任したが、その間に各地の牧師補を経験したりもしている。1755年ころに郷里へ戻り、何度かセルボーンの牧師補を務めた後、1761年にはセルボーンに居住したまま、隣村ファリンドン教区の牧師補となった。1784年からはセルボーンの牧師補として、1793年6月26日に亡くなるまで、その職務に甘んじた。

余りにも名高い『セルボーンの博物誌』(以下、『博物誌』と略)は、実際にはその地の故事の記述と合わせ、『サウサンプトン郡セルボーンの博物誌及び故

事』(*The Natural History and Antiquities of Selborne in the County of Southampton*)という書名で1788年12月に刊行された。このうち、「ありふれたこととして、しばしば見逃されてしまう創造の驚異」(“the wonders of Creation, too frequently overlooked as common occurrences”)¹⁰に読者の注意を促すことを目的とする『博物誌』の部分は、当時の著名な博物誌研究者であったトマス・ペナント(Thomas Pennant)及びデインズ・バリントン(Daines Barrington)に宛てた書簡に若干の加筆修正を施したのから構成されている。その内訳について触れておくと、第1部に相当するペナント宛書簡は1767年から80年までの44通(ただし、日付のない第1書簡から第9書簡までは実際にペナントに送付されたものではなく、『博物誌』刊行に際し、ホワイトが序論として創作したと考えられている)、第2部のバリントン宛書簡は1769年から87年までの66通が収録されている。なお、ペナントはホワイト自身がたびたび言及している『英国動物誌』(*The British Zoology*, 1768-70)の著者として高名であったが、その彼もまた、「博物誌の主要な目的は、全能なる神に対する崇拜の念を高めることにある」と述べている。¹¹

幼いころから身近な自然に親しんでいたホワイトは1751年に日誌形式による観察記録『庭園暦』(*Garden Kalendar*)の記載を開始し、68年からはバリントンが考案した記録帖(“Naturalist’s Journal”)を利用しながら記述を継続した。『庭園暦』に記された、驚異的なほどに几帳面な観察の日々、その結実こそが『博物誌』に他ならなかった。

〈ホワイトのありかた〉

ややもすれば世間から隔離した生涯を送ったと思われがちなホワイトではあるが、実際には人付き合いもよく、教区民からも慕われていたという。その彼が博物誌研究を行なう上で大いに頼りとしたのは実の弟、ジョンとベンジャミンであった。ジョンは長いことジブラルタルで海軍付き牧師を務め、同時にリンネとも文通するほど、博物誌に造詣が深かった。ロンドンで出版業を営んでいたベンジャミンは兄ギルバートをペナントに紹介し、ついには『博物誌』の刊行を引き受けている。弟たちの協力によって、ホワイトは当時の著名人の知

己を得ることができたし、ロンドンに赴いたおりにはいたい王立協会の会合に出席したらしい。また1774年2月10日には、イワツバメに関する彼の論文がバリントンにより、王立協会で読み上げられている。さらに『博物誌』中のバリントン宛第16、18、20、21書簡は王立協会に投稿済みの文章に手を加えたものである。これらの投稿論文は、やはりツバメ類に関する観察と考察が主題であり、1774年から75年にかけて王立協会の会報『哲学論叢』(*Philosophical Transactions*)に掲載された。これらの事実からも明らかなように、ホワイトを評価する人々は確かに存在していた。しかしながら、そうした人々の援助や協力は日常的に期待できるものではない。現実に行なわれる博物誌研究に関して言えば、情報や刺激に乏しい辺鄙な小村におけるホワイトの日常は例外があるにせよ、ほとんど孤立無援の境遇にあった。

そのような人物が書き記した『博物誌』は優れた観察と考察の記録であると同時に、個人的心情を吐露する場としての機能をも果たすことになる。作者の詠嘆や信念、あるいは野心や嫉妬ばかりか、他の研究者批判などの興味深い言説がさまざまに繰り返されるのである。ホワイトは、独りであることから生じる苛立たしい思いを何度か包み隠さずに告白してもいる。

勉強の結果、博物誌の研究に進んでいったような人を、隣人中ただ一人としてもちあわさなかったことは、私の不運でした。そんなわけで、私の研究心を燃えたたせ、注意力を鋭敏にしてくれるような仲間がないため、幼時から心惹かれていた学問も、遅々として進まなかったのです。

(P 10 [ペナント宛第10書簡]: 1767年8月4日)¹²

……と申しますのは、人の力を借りないで、独力で、自己の直接の経験に基いて、博物誌を始めるということは、容易な業ではありません。涯しない自然の原野には、観察の余地は尽くことはありませんが、(自己の観察する事実に誤りのないよう努力するならば) 研究は、遅々としてなかなか捗るものではありません。そして、長年かかって蒐集し得たものを集めてみても、非常に狭い範囲内に止まることでしょう。

(B 5 [バリントン宛第5書簡]：1770年4月12日)

これらの箇所では訴えられている感慨——無限の観察対象を前にした自己の無力感と孤独感——は、紛れもなく真実のものであろう。しかしながら、こうした内面の葛藤はホワイトにあっては、独自の境地を切り開く方向に作用した。同好の士もすぐには得られず、セルボーンという狭い土地で限られたことしかできないというのは、必ずしも実践可能なものが存在しないことを意味してはいない。むしろ彼の境遇こそは、他とは違う、独自の視点を確立する契機となりえた。ホワイトは、文字どおりに「人の力を借りないで、独力で、自己の直接の経験に基いて、博物誌を始める」ことを選んだのであった。独りであることを自覚したホワイトがめざした道、またナチュラルリストとして取った姿勢を理解する上で、『博物誌』にはとりわけ注目に値する一節が含まれている。

貴下も認められますように、動物誌研究者は、単に特徴を記述し二、三の同義語を列ねることに満足している傾向を、多分にもっております。理由は明白です。仕事が、すべて、自家の書齋内で行なわれるからです。ところが、動物の生活や習性の研究は、遙かに手数のかかる、困難な仕事で、活動的な研究心の強い人たちで、しじゅう田舎に住んでいる人でなければ、できることではないのです。

(B 10： 1771年8月1日)

ホワイトはこの箇所でも、収集・分類を主眼とした当時の一般的な動向に言及している。事実、彼自身も時代の趨勢に関心を示していたことの証拠は、『博物誌』の各所に見受けられる。しかしながら批判的な口調からも明らかなように、第一義的にホワイトは分類とは異質なものを求めた。ここでホワイトが訴えかけているのは、「動物の生活や習性の研究」 (“the investigation of the life and conversations of animals”)こそが博物誌の根幹だということ、さらにこの根気がある、「困難な仕事」を担うべきなのが「しじゅう田舎に住んでいる人」 (“those that reside much in the country”)だということに他ならな

い。自負と確信に満ちた断定的な表現の背景には、紛れもなく自らの経験という根拠が存在している。だとすれば、ホワイトの言う「田舎」をただちにセルボーンに置き換えることが可能となる。ナチュラリスト=ホワイトにあっては、「動物の生活や習性の研究」とセルボーンという土地が切り離し難く結び付いているのである。この意識形成がホワイトの内部で行なわれた経緯を、『博物誌』に即して辿るべきであろう。彼が自らを「定住者」のひとりとして位置づけたことも、この問題を巡る事情と密接に関わっていると思われる。

〈「動物の生活と習性の研究」〉

“the life and conversations of animals”とは極めて明快なものの言いではあるが、ホワイトによる意義づけとその実際を考察する以前に、語義を検証しておく必要がある。言うまでもない意味で用いられている“life”はさておくとすれば、一応「習性」という訳語を与えておいた“conversations”が確認の対象となる。*OED*における“conversation”の項には、以下のような語義が記載されている。

1. The action of living or having one's being in a place or among persons. Also *fig.* of one's spiritual being.
Obs. (最終引用例 1705年)
2. The action of consorting or having dealings with others; living together; commerce, intercourse, society, intimacy.
Obs. (最終引用例 1770年)
6. Manner of conducting oneself in the world or in society; behaviour, mode or course of life. *arch.*

ホワイトは直接には“conversations”を6の意味で用いていると思われるが、それと同時に、ラテン語の原義に近い1、2の語義をも含意しているのでは

なかったか。というのも、生命を持ち、互いに関わり合って生きる自然界の動植物に眼を向け、心を傾けること——ホワイトは揺るぎない信念を抱きつつ、終始これを実践していたからである。ちなみにウォルター・ジョンソンによれば、ペナント宛第28書簡(1770年3月)の結びには当初、「動物の生活、習性、営みこそ、博物誌の生命にして魂なのであります」(“The life, conversation, and economy of animals are the life and soul of natural history”) という力強い宣言が置かれていたという。¹³こうしたホワイトの言説からは、時代に先駆けて生態学的方法を導入したとも言える博物誌研究者の相貌が直接・間接に浮かび上がってくる。¹⁴それは、ときとして強烈な個性を持つ存在として前景化されることもあった。

貴下の言われる疑問……はあまりにも難問題で、私には、お答えできません。しかも、度々私は驚嘆の声を放ったことですが、その事実は明瞭です。もしその問題で、著述家たちの書いたものを覗いて見るにしても、ほとんど満足は得られますまい。発明な人たちは、どんな理論を自分の理論として選ぶにしても、その理論を支持するために、即座に、もっともらしい議論を進めてゆくでしょう。がその場合、悲しいことには、議論はすべて推測の上に立っているのですから、仮説は結局仮説にすぎないということです。

(P 24 : 1769年5月29日)

これは、アメリカ固有の動物に関する問い合わせに答えた書簡の一部である。「発明な人たち」、「もっともらしい議論」、「推測」、「仮説は結局仮説」など、強烈な言葉づかいと批判精神は『博物誌』の中でも際立っている。この書簡の文面と読み合わせるべきものが、次に引用する記述である。両者の時間的な隔たりはわずか一ヵ月ほどしかない。

先月ロンドンに滞在しておりました際、私は。博物誌の問題についてときおり貴下にお便りする光栄に浴したい旨の軽いお約束をいたしました。

ところで、早速そのお約束を果たすことになりましたが、と申しますのも、貴下が非常に思い遣りの深い方であり、物事を大目に見て下さる方、特に、筆者が、他人の著作からではなく、対象物自体から観察の結果を得ている野外のナチュラリストであると名乗っている場合、特にそうであることを承知しているからです。

(B 1 : 1769年6月30日)

ここで言及された「筆者」がホワイト自身を指しているのは、ほぼ間違いのないところであろう。この二通の書簡で発せられた言葉は、いわば、ナチュラリストの独立宣言と解釈することができる。他人の著書や理論、あるいは仮説の権威に盲従することを拒否し、野外に出て、自分自身の眼を頼りに直接自然と対峙することで「動物の生活と習性」に迫るというからである。「野外のナチュラリスト」(“an out-door naturalist”)——これこそが、ホワイトの獲得したアイデンティティなのであった。

実際、精緻な観察者ホワイトは身近なところで繰り広げられる自然界の現象に向けて、鋭く暖かい視線を注いだ。無限にある観察対象を見つめ、経験を踏まえながら合理的な説明を施そうとする試みに固執し続けたのである。その具体例としてはツバメの営巣など、枚挙に暇がないものの、自然についてそれほどの知識を持ち合わせていない読者でさえ、容易に理解しうる記述も残されている。

これらの池について、ある一つの事柄——決してこれらの池にだけ限っているわけではありませんが——を黙って見逃すことはできません。それは、次のような牛の本能についてでありまして、夏の暑さの酷しい時刻には、牡牛も、牝牛も、仔牛も、さてはまだ仔を生まぬ娘牛も、牛と名のつくほどのものごとくが、常に池まで退散することなのです。池には蠅も比較的少ないことですし、水の涼気を吸込みながら、お腹まで水につかるものもあれば、足の中ほどまでのものもあり、朝の十時ころから、午後の四時まで、もくもくと口を動かして鬱をはらし、それから食事に戻って

ゆくのです。こうして、日中の大部分をすごす間には、多量の糞を落とします。その糞には虫がわきます。こんなわけで、魚に餌を供給することになるのですが、この偶然がなかったならば、魚は餌に不自由することでしょう。偉大な配剤者 (“a great economist”) である自然は、こうして、一つの動物の気晴しを、他の動物の生活の資に変えてゆくのです。

(P 8)

人間に親しすぎるほどの牛でさえ、鋭い観察眼を免れることはなかった。この一節、とりわけ後半を読むとき、ホワイトが実際に何時間も一箇所を見続けていたことに疑いの余地はなくなってしまう。まさしく、互いに関わり合って生きる「動物の生活と習性」がみごとに切り取られているのである。このような観察からは、生態に関する豊かな成果がもたらされた。研究者たちが指摘するところでは、ホワイトによる博物誌上の新知見として、ノドジロムシクイ、カヤネズミ、ヨーロッパヤマコウモリの同定、ムシクイ族に含まれる3種の識別、哺乳類と鳥類における性徴の意義、鳥類におけるテリトリーの認識、ミミズに関する考察（これは、ダーウィンの最後の著作に影響を与えたとされる）などが挙げられるという。¹⁵とはいえ、最も注目すべきなのは、上に引いた牛の記述からも嗅ぎ取られるように、いかなる視座から自然を捉えてこれを説明し、細部の正確さをいかにして適切に伝えるかを、ホワイトが自らに課していることであろう。

〈セルボーンへのこだわり〉

ホワイトが博物誌研究者として取った姿勢が何に由来するかと言えば、それは、セルボーンにおける観察行為以外には考えられない。従って、自分の眼を頼りとする野外のナチュラルリストとしての自負・自己規定を、セルボーンという土地から切り離すことは不可能なのである。この村はホワイトの生まれ故郷であり、しかも当時の囲い込み (enclosure) の魔手を奇蹟的に逃れ、昔ながらの美しさを今なおとどめているという。親しみや懐かしさといった感情が、人間と土地との結び付きが育まれる過程でかなりの比重を占めていることも確か

であろう。『博物誌』の刊行に際し、ホワイト自身がペナント宛書簡の体裁を取りながら、セルボーンについて愛情のこもった詳細な説明を行なっているのも事実である。しかしながら、セルボーンに対するホワイトのこだわりには何か独特の意識が作用している、あるいは、何か積極的な意義づけが伴っているのではなかったか。これを探る手がかりは、まず、ペナント宛第26書簡に求められる。この書簡の冒頭でホワイトは、スコットランド旅行の報告を送ってもらった札を述べるとともに、次のように言う。

普通そうした遠征のとかく効果のあがらないのは、急ぐがため、と申しますのは、当然必要な時間の半分も予定しておかないで、帰国の日は定めておき、自然の作品を研究する科学者というよりは、寧ろ急ぎの旅でも出ているかのように、あちらこちらと駆けずり廻るからです。

(P 26 : 1769年12月8日)

言うまでもなく、性急な旅人的姿勢は、これを批判するホワイトの対極に位置する。彼の主張の根拠となっているのは、「しじゅう田舎に住んでいる人」による日常の実践なのである。また、別の機会にホワイトは、もしも自分に取りえがあるとすれば、それは長期の観察から得られた正確さであると語ったりもする。そのさりげない口調は自信に満ちている。

私のささやかな鳥の体系に御満足下さいました由承知いたし、私としまして少なからず嬉しきことに存じました。その記述に何か特徴がありとしますれば、それは正確という理由によるものに相違ありません。長い歳月にわたって、観察しようと思う鳥類の表をポケットに収めて、馬や徒歩で仕事に出かけた際には、その日ごとに、どの鳥が歌いつづけているか、どの鳥が歌い止めているかを一つ一つ書きとめておきました。ですから、事実の正確さという点では、十二分の自信をもっております。

(B 3 : 1770年1月15日)

この書簡からは、自らの方法の正しさを信じて疑わない「野外のナチュラルリスト」としての自己像が浮かび上がってくる。しかも、こうしたた発言の根拠には、セルボーンにおける日常があった。それを示すものとしては、時間が多少前後するものの、ペナント宛第40書簡(1774年9月2日)、バリントン宛第42書簡(1778年8月7日)、同第43書簡(1778年9月9日)などに記載された、鳥たちの行動や鳴き声についての詳細な報告が即座に挙げられる。

とはいえ、セルボーンに腰を据え、正確さを旨とする観察を継続するのは、ホワイト自身がたびたび洩すように、多大な困難を伴っていた。だとすれば、彼を突き動かしていたものとは何であったろうか。ひとつには、博物誌への貢献という思いがあった。「動物の生活と習性の研究」を宣言した箇所以外にも、『博物誌』には、この点に関して見逃すことができない記述がある。ホワイトはペナントとバリントンに宛てて、間を置かず、スイスの学者スコポリの『博物誌研究第一年報』に言及しながら、ほぼ同一の内容を伝えたことがあった。ペナントに対しては、次のような言葉が発せられている。

専攻論文執筆者は、その生国が何処であるにしても、博物誌愛好の徒から大いばりで、あるていどの敬意と賞賛を要求して然るべきだと思います。と申しますのは、何人にしてもしただ一人で自然の作品をあまねく研究しつくすということは不可能なのですから、これらの部分的な著者は、その部門部門においては、概括的な作家よりも、その発見は正確であり誤謬は少ないでしょうし、かくして次第に普遍的な正しい博物誌への道は開けるのでしょうから。

(P 31 : 1770年9月14日)

確信を込めて語られているのは、限られたものから「普遍的な正しい博物誌」へということに他ならない。さらにバリントンに対しては、ひとつの場所に研究範囲を限定する者こそ、実は自然に関する知識の進歩に貢献するのだという見解が表明される。

ただ一地方のみを研究範囲とする人たちは、とても研究の手の及ばないほど広い範囲に手をだす人たちよりも、恐らく、博物誌の知識の進歩に寄与するところが遙かに大きいと存じます。あらゆる国、あらゆる地方に、それぞれ独自の専攻論文執筆者があるべきです。

(B 7 : 1770年10月8日)

これらの文面に込められた思いは明らかにセルボーンでの経験に根ざしたものであり、「動物の生活と習性の研究」、「野外のナチュラルリスト」などに表明された自己規定と完全に重なり合う。定住によって、個別から普遍へ——セルボーンに住まうことの積極的な意義の一面を、ホワイトはこのように捉えていた。

しかしながら、ホワイトとセルボーンの結び付きは意識化された目的にとどまってははいない。その底流として、ダイナミックな関わりと言えるものが感じられるのである。この村における生き物を知り、理解するというのは、そのおのおのが固有の存在価値を持ち、豊かな生を営んでいる事実をホワイト自身が受け入れることと通底している。このとき、単なる観察、記述、あるいは解釈を超えた状況が成立する。この点について、とりわけ示唆的なのがツバメ類に向けられたホワイトの関心と愛着だと言える。すでに触れたとおり、王立協会で発表されたホワイトの論文はすべてツバメ類を論じたものであったが、『博物誌』においても、この仲間——イワツバメ (house-martin, marlet)、ツバメ (swallow)、アマツバメ (swift)、ショウドウツバメ (bank-martin) の四種——は繰り返し取り上げられ、羽毛や巣に寄生する虫なども含め、文字どおりに多角的で行き届いた観察と検討の対象となっている。しかも、ツバメ類の記述が緻密なものでありながら、それと同時に、いつにも増して優しい情感をたたえていることは『博物誌』の特質でもある。次に引用するものでさえ、単にその一例に過ぎない。

ツバメの類は、頗るいやみのない、害のない、面白味のある、社交的な、有益な鳥族です。庭の果実には手をだしません。ただ一種を除けば、すべて喜んで私どもの家になつきます。渡りをしたり、歌ったり、驚くべき軽

快さを見せてたりして、私どもを喜ばせます。それに、家の庭から、ブユやその他厄介な虫の類の煩わしさをなくしてくれます。

(B 15 : 1773年7月8日)

たたみかけるように連なる形容詞は、あたかもホワイトが抑制の利いた日頃の語り口を忘れてしまったかと思われるほどの事態を招いている。しかも、微かではありながら明白に表出された擬人化への傾斜は客観性を一步踏み越えてしまうものであろう。ツバメ類の記述に託して、ホワイトは自らの自然観察の本質を露呈させた。それは、生きるものそれ自体の意義を認める感情に、また彼自身と自然界の事物との交歓に還元される。この鳥たちは親しい交わりを結んだ隣人とみなされているのである。同じ時間と空間を生きる存在と向き合い、観察と考察を媒介として関わりを見だし、親密な結び付きを形成すること——その持続的な作用の過程こそが、『博物誌』という形を取ったのであった。ここに引用した一節は、人間の感情と自然界の生き物との間に現出した関係性の美しい瞬間をみごとに切り取ってみせている。

恐らくはこうした同胞意識を見抜き、聖職者としての側面を重視しているのであろうが、リチャード・メイビーは、ホワイトの場合、「教区」(parish)という概念が極めて意義深い役割を担っていたと指摘している。

「教区」とは、大きな意味が負荷された概念である。教区は単に地理や教会行政のみならず、忠誠心の歴史と体系とも関わっている。私たちの大半にとって、それは私たちが帰属していると感じている、定義不能でありながら評価可能な領域である。その境界は地図上の線であるよりは、神に対する私たちの心のこもった忠実さが及ぶ範囲となっている。この忠実さは人間と同様に野生生物をも包括する概念であり続けたし、「村の鳥」……が毎年回帰することへの村全体の喜びにおいて、最も明確にその本質を明らかにするものである。私には、これらの鳥がホワイトのお気に入りであったことが、単なる偶然だとは思われない。¹⁶

一般的な意味からすれば、教区は教会を、そして究極的には神を中心とする信仰・生活の基盤である。しかしながら博物誌研究を介したとき、メイビーが言うように、牧師補ホワイトの領域である教区セルボーンは人間だけが占有するものではなかった。セルボーンにおいてホワイトはツバメ類に愛情を注ぐだけでなく、一般には毛嫌いされることがしばしばであるクモやヘビ、ヒキガエルなどの生き物にさえ眼を向け、これらが持つはずの固有の生きかたを認めている。「ありふれたこととして、しばしば見逃されてしまう創造の驚異」に注意を促す「動物の生活と習性の研究」には遺漏がなかった。

メイビーが指摘する「教区」をここで、共同体と言い替えることが許されるであろう。すでに言及したように、ホワイトはかつて「存在の連鎖におけるもうひとつの美しい環」の喪失を嘆いたことがあった。その嘆きはとりもなおさず、セルボーンが調和世界であるべきだということを含意する。この村は「広大な存在の連鎖」によって構成され、人間や他の生き物、つまりすべての被造物がそれぞれに関わり合う小宇宙だったのである。一個の存在が共同体においてひとつの位置を占めるという認識において、稀有の観察記録『博物誌』には、自らを含むすべての被造物のあるべき場所を発見し、それを確認／認知するという営為が刻み込まれている。結果としてひとつの土地への帰属感を育む、創造的な記録なのである。その限りで、ホワイトが言う「定住者」とは、セルボーンの村に生き、その地に根づいていることを確信した人間の歓びを背景とする宣言に他ならない。

ホワイトにとって、野外のナチュラルリストとしてのアイデンティティを形成し確立するためには、セルボーンでなくてはならなかった。ネイチャーライティングの主要な論点のひとつである「場所の感覚」——ひとりの人間と土地との関わり、意識化された結び付き——を問う行為はこうして、18世紀という時代を生きたイギリスの牧師補にすでに顕在していたのである。

(本稿は、1995年10月に開催された日本英文学会中部地方支部大会のシンポジウム「アメリカ文学と Nature Writing」における発表に加筆修正を施したものである。)

註

1. 『場所の感覚』と『家路』は、日本で初めてアメリカン・ネイチャーライティングを特集した雑誌『フォリオa』第二号(1993)に収録されている。なお、ベリーの言葉はステグナーのエッセイに引用されて有名になったものであるが、その出典は不明である。
2. Frank Stewart, *A Natural History of Nature Writing* (Island Press, 1995), pp. xxi-xxii.
3. Richard Mabey, ed., *Gilbert White: The Natural History of Selborne* (Penguin Bks., 1987), p. 3.
4. 近代イギリスにおける博物誌研究の系譜については、次註のKeith Thomas 及び C.E. Raven, *English Naturalists from Neckam to Ray* (Cambridge Univ. Press, 1947) を参照。
5. Keith Thomas, *Man and the Natural World: A History of the Modern Sensibility* (Pantheon Bks., 1983), p. 15.
6. この部分の論議に際しては、Keith Thomas の他、以下を参照した。D.E. Allen, *The Naturalist in Britain: A Social History* (Allen Lane, 1976)、木村陽二郎『ナチュラリストの系譜』(中央公論社、1983)、西村三郎『リンネとその使徒たち』(人文書院、1989)、松永俊男『博物学の欲望』(講談社、1992)。
7. W.S. Scott, *White of Selborne* (The Falcon Press, 1950), pp. 72-73.
8. Herbert Davis, ed., *Pope: Poetical Works* (Oxford Univ. Press, 1966), p. 248.
9. 『博物誌』(ペナント宛第6書簡)。
10. Richard Mabey, ed., *op. cit.*, p.3.
11. Keith Thomas, *op. cit.*, p. 282.
12. 『博物誌』本文からの引用は、山内義雄訳(講談社、1992)に拠る。ただし、字句を一部変更したことを断わっておく。他には、寿岳文章訳(岩波書店、1977)、西谷退三訳(八坂書房、1992)も参照。
13. Walter Johnson, *Gilbert White: Pioneer, Poet, and Stylist* (John Murray, 1928), p. 28.
14. *OED* によれば、“ecology”の初出用例は1896年である。ホワイトが現代の生態学を知らなかったことは言うまでもない。しかしながら、彼の方法と彼が用いた“economy”という語(前註参照)には、明らかに生態学的認識の萌芽が認められる。
15. たとえば、Frank Stewart, *op. cit.*, p.25 を参照。
16. Richard Mabey, *op. cit.*, p. xvii.